

重度知的自閉性障害児者の地域生活を支える実践技能の検証⑥

～環境調整としての家族支援の実際～

特定非営利活動法人 心身障害児者療育会
きつつき会 大曾根 邦彦

I. はじめに

私たちの児童福祉施設は、子どもたちの日常生活に近い「集団あそび」の場の活用と、そこで得られた行動評価に基づいた「環境調整」を療育実施計画の中心に位置づけた発達支援を行っている。特に、自閉性障害児の地域生活支援のためには、通園施設による日中活動を通じた家庭生活の安定が重要であり、その焦点は家族内対人関係性の調整である。

今回は、「重度知的自閉性障害児者の地域生活を支える実践技能の検証」テーマで6回目となるが、成育環境の最大の要素である家族に対する環境調整を意図した支援の実際について、技能検証の各論として報告する。

II. 方法

当施設は、地方都市の郊外に位置する児童福祉施設で、常時利用は精神遅滞を伴う自閉性障害児を中心とした2歳から14歳の10名である。これに青年期支援の常時利用者6名を加えた計16名に対し福祉専門職9名が従事しており、従事者の子育て支援の一環として事業所内保育も行っている。

基本的には就学前幼児と学齢児はそれぞれ約5名単位の集団を構成し、事業所内保育の従事者子女数名を併せ統合保育・教育の環境を形成している。

1. 集団あそび

支援の焦点は、「集団」活動から生まれる相互作用の力動と、「あそび」が持つ自己表現や心身の浄化作用の活用である。特に、療育の道具立てとして10名以内の小集団が持つ人間関係過程と、その中での子どもと支援者を含めた相互作用に

着目している。この人間関係過程の相互作用は、 $n(n-1)$ として数値化される。すなわち、支援者を含めて6名で構成される集団の場合であれば、相互作用を生み出す可能性のある30の人間関係過程自体を支援の道具立てとして、言語・非言語の自己表現と心身の浄化作用を持つあそびを媒介として活用するのが、「集団あそび」を通じた療育の手法ということになる。

この手法の詳細については前回の報告で触れており、時間的な制約もあるため今回は省略する。

2. 環境調整

「環境調整」においては、初期面談ならびに家庭訪問による不適応場面の行動観察と、「集団あそび」の場で得られた不適応行動の背景に対する気づきや、介入の手法と効果を元に、家庭における対人関係性の修復に向けた「環境調整」支援を進めている。ここで支援の焦点となるのは、自閉性障害児に対しては言語・非言語両面でのコミュニケーション不足による「家族集団」内での「孤立感」への共感であり、家族に対しては育てにくさから生まれる育児の「焦燥感」や社会からの「孤立感」への共感である。相談受理初期導入段階で「共感と受容」に基づく関係性の基礎を構築することが重要になる。

3. 連携支援

加えて、自閉性障害児に対する療育導入段階での行動評価に、科学的な側面からの客観性を確保し、療育を方向付ける基盤としていくため、医療支援を要に家庭や学校等他機関との連携支援を進めている。

III. 事例

事例 A = 5歳男児。身体機能障害は無く、ことばは喃語レベル。

診断 = 中等度精神遅滞を伴う自閉症。

家族構成 = 父・母・A・妹（2歳・未就園）。

3歳時から知的障害児通園施設での療育を受けていたが、施設でも家庭でも多動や土いじ

り・水遊びなどの常同行動が頑固に認められ、寝つきの悪さや夜泣き、早朝に目覚めるなどの睡眠障害も伴い、その改善も見られなかったために集中支援を行った事例。

1. 「集団あそび」の行動評価

Aは初回面談時の「集団あそび」の場で、他児や支援者を視界に入れずに、土や水の代替物となる手芸用ビーズを発見して、常同的にいじり始めた。しかし、その行動と視線・表情を細かに観察すると、常同的にいじったり、ばら撒いたりしているのみではなく、他児の動きも気にしながら、ビーズの跳ね返りや音を楽しんでいることが推察された。さらに、支援者のビーズいじり参加を許容し、散らかしたビーズの片付けも支援者の声かけと具体的な動きの提示、行為の共有によって拒否せずに行うことができた。これらの様子からAの“常同的に見える動きの中にはあそびとしての要素を含んだ行動が相当に含まれている可能性がある”と推察した。

2. 「環境調整」評価段階

母親に集団あそび場面でのAの様子を伝えると、“施設でも家庭でも、動き回って一人で土や水いじりを繰り返し、片付けなどで動きを止められるとかえってこたわったり、大泣きして暴れるので、信じられない”とのことであった。

夕方の家事の時間に合わせた家庭訪問により、両親が家事や妹の世話に動いた瞬間にAは水遊びに向かっていること、止めに入るとかえってエスカレートしている様子が確認できた。またAは僅かながら父親には愛着行動を示すが、母親に対する愛着行動をほとんど示さないことも分かった。このことから、Aの不応には操作可能な遊具が限定されている上に、操作性の低さを補う父母との対人関係性にも課題があるため、あそびたいという自発的・主体的行動を受け止めてもらえず、行動を止められるのみであることによって家庭内での「孤立感」を生じ、その欲求も表現できないという、生活環境の要因が加わって増幅された側

面がある、と推察した。

3. 集団あそびによる支援

家庭訪問の行動観察により“かまってほしくても遊べるものがなく、癖になっている水遊びに向かっている”ことや“父母とも楽しげにあそんでいる妹との比較で寂しさや嫉妬も感じ、水遊びで紛らわせている”ことが把握された。また両親からは“かまってほしそうに見えてもどうやってかまってあげればよいかわからない。本人も親も苦しい。”との悩みが打ち明けられた。

これを受けて、「集団あそび」に加わらない支援者によるあそび場面の行動観察と記録を行い、多動・常同行動の中に潜む、Aの発達段階相応の何らかの自己表現としての行動と、欲求表現としての意味を持たない行動とを、前後の文脈を踏まえて把握するようにした。その結果、Aの多動・常同行動の多くは①“他の子どもたちのあそびにうまく加われなかった”場合や②“やることなくて手持ち無沙汰”の時に示されていることが分かった。これに対して支援者は、多動・常同行動が出現する直前の行動に注目し、①についてはAを抱っこして“一緒にやってみたかったのかな？「入れて～」って言うてみようか？”といったことばかけをしつつ、他児との仲介と代弁を繰り返した。また②については、紙くずをまき散らす「紙ふぶきごっこ」を支援者から提案してあそびとして共有した。これらの支援を通してAが常同行動として獲得している操作可能な遊具を他児と共有し、あそびとして展開できるように介入した。

4. 環境調整支援

次に、「集団あそび」で得られた評価に基づき、Aにとっての多動・常同行動の意味とこれらへの対処方法について、「環境調整」として家庭訪問により“多動・常同行動にはあそびの要素もあるので、時には父母のほうから誘って共有してみてください”、“Aの潜在力は決して低くない”という、育ちの可能性についての評価として繰り返し伝えた。その結果、父母の中に“諦めずに、育ち

に期待する”視点が芽生え、“今までは原因不明で突然に思えたパニックに、Aなりの理由があることが分かってきた”という手応え感が表明された。これに伴い、未形成な側面が見られた母親に対する愛着行動も、母子の人間関係過程の「受容」方向の相互作用により、改善がみられた。

また、並行して行われた医療支援による睡眠障害改善も加わり、支援開始半年後に家庭崩壊の危機は回避された。

事例 B＝小学校特別支援学級3年の9歳男児で
言語能力は高く知的機能は平均以上。

診断 ＝受理段階診断はアスペルガー症候群、
支援開始後の診断は高機能広汎性発達障害。

家族構成＝父・母・姉（小学6年）・A・弟（幼稚園年中）。

当初の主な課題は、姉弟への攻撃を中心とした家庭でのパニック行動で、内服治療や特別支援教育では改善せず、母親が、夏休みの長期在宅への強い不安を抱えて来訪し、緊急の集中的な支援を行った事例。

尚、本事例は前回詳細な報告を行っており概要を報告する。

1. 「集団あそび」の行動評価

Bは「集団あそび」の場で、幼児がおもちゃを散らかしながら遊んでいるのを見て“僕はここはだめだ”と口にしたが、それに対して支援者は、Bの心情やことばを“そうなんだ～”と受け止め、一方で“まだ小さいから、すぐに散らかしちゃうんだ～”といった、否定の要素も、肯定の要素も含まない、率直な事実説明に努めた。このような働きかけをきっかけに、Bは雑然としたなかで、幼児との人間関係も楽しみながら、自由に遊ぶようになっていた。これらの様子から、Bは“自分の意思を受け止めてくれる場なら、適応できる潜在力を持っている可能性がある”と推察した。

2. 「環境調整」評価段階

家庭訪問により、Bと姉弟との間の小さな摩擦に母親が強迫的に過剰な形で姉弟を守るように介入しており、それがBの家庭内での「孤立」につながっていることが分かった。支援者は“Bが本当はどうしたかったのか、声をかけずに一呼吸見守って見ましょう”といった助言を繰り返した。そのなかで母親は“見守ると衝動性が少なくなる気がする”という手応えを語り、家庭訪問中の短時間の間にBは母親の介入の減少によって姉弟攻撃を思いとどまったり、自分の非を自ら姉弟に謝罪することもできるようになった。

3. 集団あそびと環境調整による支援

「集団あそび」の場において、支援者の仲介により自分が得意なあそびで十分に自己表現し、支援者や他児との活動の共有で心身の浄化も味わった。

並行して、これらの経緯を、家庭に対する「環境調整」として家庭訪問や連日の電話相談により、繰り返し具体的に伝えた結果、支援開始1か月後には、両親の中に“不安視されなければ、本来持っている適応力を出せる子”としてBを「受容」する方向性が生まれ、家庭生活も安定に向かった。

V. 考察

2事例共に、「環境調整」を意図した集中的な家族支援を実施しなかった場合には、主訴の改善は困難であったと推察される。

「環境調整」の家族支援によって、施設療育効果の日常生活波及が確認された背景としては、①自閉性障害児は、各生活場面固有の対人関係性によって、その集団生活への適応・不適応が左右される要素が大きいこと、②施設の日中活動により得られた療育上のヒントを、家庭養育環境に対する直接的な評価と介入によって父母に提示することの有効性が示唆された。

多動・自傷他害などの危険行為を伴い、不適応行動が容易に改善しない支援困難事例においては、住環境からの作用も受けて対人関係性に固有

の構造を持つ「家庭内成育環境の調整」としての「家族支援」を実施することが、重要であると考えられる。

文 献

- U.フリス，富田真紀ら訳（2009）：自閉症の謎を
解き明かす（新訂版），東京書籍，東京
- L.ウイング，久保絃章ら監訳（1998）：『自閉症ス
ペクトルー親と専門家のためのガイドブック』，東京書籍，東京
- G.コノプカ，永井三郎訳（1954）：収容施設のグ
ループワーク，日本YMCA同盟出版部，東京
- G.コノプカ，前田ケイ訳（1967）：ソーシャル・
グループ・ワーカー援助の過程ー，全国社会
福祉協議会，東京
- H.B.トレッカー，永井三郎訳（1978）：ソーシャ
ル・グループ・ワーカー原理と実際ー，日本
YMCA同盟出版部，東京
- 大曾根邦彦（1987）：施設援助の課題ーソーシャ
ルワークの視点からー，ソーシャルワーク研
究，VOL.13 NO.3，相川書房，東京
- 大曾根邦彦（2009）：障害者自立支援における社
会福祉実践の課題，社会福祉研究，106号，
鉄道弘済会，東京